

No

41

自分が経験した思いを友だちの思いと重ね合わせ励まそうとする。

…やさしい子ども…

負けてもいいんだよ 友だちの気持ちに気づき一緒にがんばる 1月

☆ 視点に関わる背景（4月からの状況） ☆

- 年長児はクラス内に16名中4名のみである。年長児は赤チームと呼ばれており、クラスのリーダー的存在である。始めは照れくささを感じていたが、日々の生活や様々な行事を通して自信が付き、少しずつ年中、年少児の手本となるような行動が現れてきた。
- 年長、年中、年少混合の4名で構成された4グループで活動する機会を持っている。時々トラブルが起きることもあるが、年長児はグループ内の友だちの意見を聞きながらまとめ、自分たちで生活や遊びを進めていく喜びを感じ始めている。

☆ 接続期の状況（相撲ごっこの時間～） ☆

子どもの姿・子ども同士のかかわり	保育者の援助・視点
<ul style="list-style-type: none"> • 自分たちで遊びのルールを決め、展開して遊べるようになった。 • 相撲ごっこを取り入れたところ、大変盛り上がり、相撲大会が開催されるようになった。皆で一緒に遊ぶ楽しさ、友だちと触れ合いながら体を存分に動かして遊ぶ面白さを感じている。 • 1対1の対戦を終えた後、Aが皆に提案をする。 A：「じゃあ、今度はチームを作らない？」 • みんなが賛成し、チーム分けをする。 B：「赤チーム（年長児）は4人だから、2人2人になればいいんじゃない？」と提案する。 話し合いの結果、7人と8人のチームができる。 • チーム対抗の相撲大会が始まる。 A：「最初は赤チームがやって見せるから」と、年長児が皆の手本となり始める。 • 対戦していくうちに負けてばかりで床に座り込んだままのD（年少児）がいることに気付いたCが声をかける。 C：「Dちゃん、やっていないよ」 D：（黙り込む） A：「負けるのが嫌なんじゃない？」 C：「えっ、負けてもいいんだよ」 A：「そうだよ、負けても大丈夫だよ」 C：「だって、さっき私も負けたよ。悔しいから次は頑張るんだ。だからDちゃんもやってみたら」 • Dはまた相撲ごっこに参加するようになり、年長児はたくさん応援をしていた。 • Dは負けても泣くことは無くなった。 	<ul style="list-style-type: none"> • マットを用意し土俵にする。 • 子どもたちの好きな遊びなので、十分な時間を設け、展開を見守る。 • 全員で何人か、欠席者はいるか、何人ずつ分かれればよいかを考えながら、チーム分けをする経験をさせる。保育者は必要最小限の提案にし、子どもたちが自分たちで気が付けるように見守る。2チームが同人数にならないことを残念がっていたので、1人が何度でも行うことを提案する。 • 自分たちの勝ち負けだけでなく、しょげているDがいることに気が付くような声掛けをする。 • 年長児のD（年少児）への対応を見守る。 • 「Dちゃん、とっても頑張っていたよね」等、負けて悔しかった気持ちや頑張りを受け止めた。 • 相撲ごっこが盛り上がり、より楽しめるよう、保育者も一緒に応援する。



☆ 接続期の指導場面における配慮事項 ☆

子ども同士やチーム内のトラブルは、自分たちで話し合ったり、考えたりすることで解決できるとに気付かせ、見守っている。自分の意見を言い合いながら、友だちの意見に耳を傾け気持ちに気付くことが出来るようにしている。又、異年齢クラスの良さとして、年下の子どもに対して遊びや生活の様々な場面で、自分の経験をもとに手助けしたり、優しくしたり出来るようにしている。友だちの良い所を見つけれられる力が育つように配慮することが大切である。